

子どもの「できた!」を支える研究



三上美咲助教

不器用さの原因と効果的な支援方法」についての研究です。「走るのが苦手」「手が不器用」といった運動の困難を持つ子ども

共に考え不器用克服

三上美咲先生は、弘前市の5歳児発達健診に参加し、子どもの不器用さの原因を明らかにするとともに、効果的な支援方法について研究しています。5歳児健診は就学前の重要な時期に行われ、子どもの日常の様子を把握

す。先生は保育園や学校での支援を通して、不器用さによって生じる日常生活や活動の困難を目的の当たりに引き寄せました。研究は、そのような子どもたちの力になりたい」との思いから始まりました。作業療法などのリハビリテーションでは、

調整したり、使いやすしい道具や目印を使ったりするなど、活動や生活がしやすいように環境を工夫する支援も行っています。このように、多様な支援を通して、不器用さとうまく付き合っていく方法を見つけていきます。

▽複雑な困り事に向き合う難しさ
子どもの不器用さは脳のさまざまな働きに關わります。1人の子どもが複数の発達障害を併せ持つことも多く、不器用さの表れ方には大きな個人差があります。そのため、集めたデータをそのまま

支援に当てはめるのではなく、一人ひとりに合わせて工夫する必要があります。さらに、同じ動作でも状況によって表れ方が変化するため、多様な場面での観察が必要です。また、子ども自身が困り事をうまく説明できない場合も多いた

め、周囲の大人からの情報も重要手掛かりになります。こうした複雑さに向き合いながら、より良い支援方法を探っています。▽三上先生からのメッセージ
日常を当たり前のものとして受け取るのではなく、「なぜだろう」と立ち止まって考える姿勢が大切です。すぐに答えが見つからない問いであっても、その疑問を持ち続けることで、新たな視点や発見へとつながっていきます。

不器用さの問題を抱える子どもたちにとって、「上手にできるようになる」といっただけでなく、日常生活を支えることも非常に重要です。そのためには、一人ひとりに目を向け、多様な視点から考えていく必要があります。子どもたちの日常の中にある困り事に向き合いながら、より良い支援の形を共に考えていく。そのような研究に、ぜひ一緒に取り組んでみませんか。



次回(8月31日)に掲載予定。お楽しみに。(担当:弘前大学広報室・秘書室、ライター:人文社会科学部4年 佐々木志乃)



((45))

探究心旺盛な小中高生の皆さんに向けて、弘前大学の先生たちのユニークな研究を紹介するこの連載。

今回は、「子どもの不器用さ」について、弘前大学の先生たちのユニークな研究を紹介するこの連載。

探究心旺盛な小中高生の皆さんに向けて、弘前大学の先生たちのユニークな研究を紹介するこの連載。

探究心旺盛な小中高生の皆さんに向けて、弘前大学の先生たちのユニークな研究を紹介するこの連載。



(イラスト:教育学部4年 関川智乃)

め、周囲の大人からの情報も重要手掛かりになります。こうした複雑さに向き合いながら、より良い支援方法を探っています。

第45回の先生 三上美咲助教 【保健学研究科/総合リハビリテーション科学領域】

※この画像は、当該ページに限りて陸奥新報の記事利用を許諾したものです。

転載ならびにこのページへのリンクは固くお断りします。 令和8年6月29日 陸奥新報掲載